

Title	<書評>黒川紀章著 「建築論」-日本の空間へ-鹿島出版会刊, 1982年4月 (初版)
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1982, 21, p. 123-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52582
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

黒川紀章 著

「建築論」 — 日本的空間へ —

鹿島出版会刊，1982年4月（初版）

建築家黒川紀章が、この十年ほどの間に発表した論文を、発表の年には関係なく三部にまとめたもので、第一部・近代主義の超克、第二部・中間領域論、第三部・日本文化と現代建築の接点、となっている。各章のタイトルは初出論文のタイトルのままで、「建築論」と銘うっていても、これはそれほど渾然とまとまったものではなく、むしろ論文集といえるものだろう。

もっとも「建築論」といってもいろいろあり、哲学者や美学者によるアカデミックなものや、作家の文学作品や芸術家のエッセイなど多岐にわたるが、なかでもこうした建築家自身による建築論が圧倒的な数に上るものと思われる。ところで、建築家のなかには往々にしてベダンティックな哲学者ぶりがみられ、本業まがいの晦渋な論文やエッセイを商業誌上に発表して大方のヒンシュクを買う場合が多く見られるが、本書の「建築論」はそうしたものととは劇然と区別された、達意の文体に支えられた明快な論旨が一貫している点をまず評価したい。

これは一つには著者が、建築の「実作者」として、こうした思索をたえず現実の創作方法との密接不可分の関連の上でおすすめて来たことによるところが多く、その点同じくメタポリズムの同人ながら、先に本欄でとりあげた（デザイン理論18）「評論家」川添登の「デザイン論」などとは全く対蹠的といえよう。

だが彼のこうした理論と実践のむすびつきは、単に建築家や都市計画家としての創造活動にのみ関わるだけではない。建築をはるかに超えたより広いデザインの全領域において、いうなれば日本の生活文化の問題として、より広い展望の上で世界に訴えかけようとする、何らかの文化運動の実践に結びついている点が注目される。このことは、彼が1960年東京の世界デザイン会議に若冠20才半ばでパネリストとして登場して以来今日迄一貫して精力

的に展開されて来たことは見のがせないが、特に近年になって、より一層本格的なものとして、その活動の巾と厚さを加えたことは、1979年アスペンの国際デザイン会議の議長として、さらには1980年横浜の第一回日本文化デザイン会議の議長としての彼の活躍に端的に示されよう。

本書のなかでも、それらは、それぞれ「グレーの文化」及び「共生時代」の2章に収録されているが、その他同じく本書のなかで印されている彼のこうした運動の記録としては、1981年オックスフォード大学での講演、「江戸と現代」、1982年英国のアポロ誌への寄稿「江戸建築再評価」で、これらは後述する21世紀に向けての著者の現代建築のパラダイムづくりへの壮大な抱負がこめられていると見られるものである。なおこうしたことで見のがし得ないのは、何よりもNHK解説委員としての黒川の文化啓蒙活動であろう。

ところで、こうした彼の創造ならびに文化活動の基底に、終始一貫して彼を駆り立ててやまない問題意識がある。彼はそれを「両義性、多義性という芸術の質、曖昧性、中間領域性という建築空間の質の問題として私の興味の中心を形成するもの」とのべているのだが、両義性 (ambivalent) とは、どっちつかずの曖昧さという点で何よりも建築空間に関して彼がしばしば作品の上で試みた軒下空間 (例：福岡銀行本店) など、いわゆる「中間領域性」の問題にかかわるものであり、多義性 (multivalent) とは、一般に多様で多面的な文化の価値基準を容認する線で、デザイン上のいわゆる他領域言語の共存、併置、混成による新時代の建築のパラダイムの構築を目ざすもので、著者はこれを「共生の思想」と呼んでいるが、第一回日本文化デザイン会議の中心テーマも彼のこの思想に基くもので、著者はこの会議で「共生の時代へ」と題した基調講演を行っている。(日本文化デザイン会議編「共生の時代」講談社、1981参照)

こうした問題意識は、一般に二元論的でエクスクルーシヴなピューリズムの立場に立つ機能主義に対立する、マニエリスム・バロックの線で、思想的にはロバート・ヴェンチャーを筆頭とする、いわゆるポスト・モダニズムの線につらなる反・モダニズムの姿勢を示すものといえるが、著者はこうした傾向を、彼なりに「利休ねずみの思想」と名づけ、その文化を「グレーの文化」とよぶことでこれを日本の文化全般に通ずる特質だと考えるのである。

本書を通読するならば、読者はまず何より、全巻をとおして上記の両義性、多義性、共生、中間領域等々、要するに「グレーの文化」に関連する用語の過度の頻発におどろかれるだろう。だが本書は要するところ、全体として黒川の第二の「グレー文化論」(彼には既に「グレーの文化」なる著書がある) にすぎないのであって、よくもまあ手を替え品を替えて、「利休ねずみ」的思考をめぐる論究をおしすすめたものだと感心する。何時だっ

たかNHKの「こらむ」でもこの「グレー文化論」を一席やっていたのを見たことがあるが、ともかく終始一貫徹底して、堂々と自信にみちた語り口で、かなりの説得力があるものと思われる。

それにしてもかつてのメタポリスト黒川が、一体何故、いつ頃からこんな新思想に鞍替えするようになったのかと、当初はその変り身の速さに驚かされたものだ。彼にいわせると、こうした問題意識は昨日今日のものではなく、そのルーツは彼の建築家的経歴の最初期、約20年程前にさか上るといふ。が、それがはっきりとグレー思想として顕在化するのには後半の10年間であることを自から認めている。この期間はすなわち、本書の内容のすべてを包含するものだが、私はどうやらこの変身、或は転向の直接的動因は、前記後半の10年間のはじめの時点でのオイル・ショックによるわが経済の大変動、高度成長から低成長への移向によるもので、間接的には彼の国際場裡での人、作品、著書などをとおしてのさまざまな思想的交流にあったと見ている。

世界を股に、たえず新しい情報に人一倍敏感なアンテナをもつ人間として、建築世界をめぐる新しい動向を、つねに新しい思考の糧として来た彼として、その建築家としての出発の当初、60年代のはじめ頃から既にジェーン・ジェコブス女史の思想と接触（彼はジェコブス著「アメリカ大都市の死と生」SD、1977の訳者でもある）、近年では自らもいうように、スーザン・ソング女史との出会いによる、その反・モダニズム的な「キャンプ感覚」への開眼、あるいはポスト・モダニズムの名づけ親、イギリスの建築評論家チャールス・ジェンクスとの、自作を介しての接触ならびにその著書の翻訳（「現代建築講義」彰国社刊、1976）などグレーへの洗脳の要因と見なしうる材料にはこと欠かないことがわかる。

こうして著者は、消費文明華かなりし60年代の高度成長下にあつて、一方ではヘリックス計画などという未来学派的な巨大都市開発計画を提案しながらも、同時点で併行的に、これとは全くウラハラな、下町の保存と再生策を盛りこんだ、彼のいわゆる「漢方療法的」都市再開発計画を提案したりなどしている。（黒川著「行動建築論」—メタポリズムの美学、彰国社刊、1967）このことでわかるように、彼自身その人間像において既に両義的なのである。つまりグレー人間、灰色建築家なのである。その点同じくメタポリズムの同人ながら、いまだに60年代に唱えた海上都市の計画や取替え計画を金科玉條のようにくりかえしている菊竹清訓の生一本さとは好対照であろう。少くとも建築思想的には黒川の方がはるかに「代謝的」であるのも面白い。

かくて菊竹は、建築のデザイン面でも、いつしか、何となく時代にとり残された観があり、作品的にも沈滞の色おおいがたいようだが、黒川はまさにこれとは反対に、私のいつ

かの黒川評での多少オーバーな表現によれば「天馬空を征く」ような成果を、作品の評価をもふくめてあげつつあるかに思われる。その黒川評において私は、彼のことを、或は晩成型の大器であるかもしれないとのべたのだが、今でもその考えに変わりはない。

今年で20年になるという彼の建築家としての創造活動に関して、私としては前半のメタボリズム時代の作品は評価の対象の外にしかない。彼の作品がどうやらモノになりそうに思われ、或は作家として大成を期しうるのでと思われるようになるのは、彼が本書に示される一連のグレー論を唱えはじめるようになってからだと思う。それ以後建築家としての彼の名声が内外で急速に高まり、その国際的な創造活動の振巾の度がますます激しさを加えるとともに、彼は、いまや師の丹下健三をのぞけば、わが国ではまことに稀有の「名士建築家」“celebrity architect”として、スーパースターの地位を築くにいたるのである。

ちなみに彼の名は、いま海外では KISHO と呼ばれ、本人もそれでなっとくして、国内でも自からそう呼んでいるようだが、前述の経歴の前半においてはそうでなくノリアキと自称していたことは、彼のこの期の著作である「ホモ・モーベンス」（中公新書、1969年初版）を見ても明らかである。こうした点にも彼の70年代以降の変身の一部がうかがわれるようだ。

彼が未だに面識のない私にその著作を送ってくれるようになるのもやはり KISHO への変身、グレー文化への傾倒と時を同じくするように記憶する。そのたび毎に私は、貴兄と同じ方向のマニエリスムの建築論的研究をやっておりますが、なかなか思うにまかせず、とか何とか、同学、同好の士への親しみをこめて礼状を出したものだが、彼のグレー文化論にはある点では共鳴しうるものの、必ずしもそうとばかりはいえないところもある。

彼はそれこそがグレー人間のグレー人間たるユエンであろうが、そのマニエリスム・パロックの線から予想されるような、いわゆるポスト・モダン派ではないことは、彼がこれら「前衛的建築家」にかなり批判的であることからわかるし、一方でモダニズムの超克を叫びながら、モダニズムを捨て切っていないグレー人間ぶりが本書でもありありと示されている。

最初の点について、彼はポスト・モダン派の代表的作家であるオーストラリアの建築家ハンス・ホラインの「建築は大衆のために存在するのではなく、建築家自身のために、あるいはエリートのために存する。建築は機能あるいは用に奉仕することはない」との芸術至上主義的・反社会的な態度にきわめて批判的で、その「人間精神の内奥に向かって行く危険を、自己解体、デカダンスの道」だといい、彼自身として、「内に向うのではない、曖昧で凡庸な道」を提唱しているし（P 90）また「マニエリスムとかコンセプトチュアルな建

築といった手法や概念操作に頼り、自からの芸術的な閉鎖世界へ突進する「前衛」とか新しい道と称する建築の大衆離れ、社会離れ」を批判する（P 79）かたわら、「私は機能主義が無効になったといっているのではない」として、モダニズムの排他性 exclusiveness によって欠落した中間領域性や曖昧性を拾いあげる「落穂拾いの作業」が今後われわれに課せられた任務であるなどという（P 140）あたりに、彼のモダニズムとポスト・モダニズムの中間を行くグレーの思想を見出しうるだろう。このあたりに、京大では西山卯三門下に席をおくとともに、大学院は東大の丹下健三に師事する、などというグレー人間黒川のハイブリッド性がうかがわれるというものだが、それはまた、彼の建築設計業務その他に関する、よろずエスタブリッシュメントの寵児としての秘密がかくされているやに思われる。

彼の海外での設計活動はついに社会主義圏にまでも及び、1979年までにブルガリアでホテル・ヴィトール・ニューオータニの設計管理にたずさわったが、そのこけら落しのパーティの席上、ジュコフ大統領の「あなたの国は資本主義社会だが、私の国は社会主義社会だ。あなたの国は古い伝統をもっている。私の国も古い伝統をもっている。しかし日本もブルガリアも別々には生きられない。あなたの作品はその輝かしい証拠となるだろう」とのべたことばに「生きる喜びと建築家である誇りを感じざるを得なかった」という黒川は、「世界は私にとってますます重いものになっている」としめくくるあたりに世界的建築家としての自負と抱負のほどがしのばれるが、こうした「勝利」にもまた彼の提唱する共生の思想が現実生きていたとの確信を一そう強めることになったと見られよう。いまや世界の建築界はその創造の核となる中心の問題が失われ、混迷した状況にあると考える著者は、「70年代に入って、西欧諸国、東欧アフリカ、中近東などで仕事をする機会がふえるにつれて、現代建築の国際性についての再考にせまられる」と語っている。

ここでの国際性とは、「西欧文化の価値体系による普遍性を意味するものではなく」これからはもはや、「より多元的な価値基準によって国際性が語られ、世界の文化が創造される時代」が1980年を境にしてやって来るのではないかといひ、「そこではイスラム文化圏、アフリカ文化圏、アジア文化圏、中南米文化圏、東欧文化圏といった、それぞれの文化圏が独自の文化的価値体系を主張する時代」だとしながらも、そうした各々の文化圏での新しい文化の創造は、「決してエクスクルーシヴな伝統主義や民族主義によるものではなく、多元的で多様な文化的価値体系の衝突、共存融合、変換を通して実現される」ものだとおぼるところに、あいかわらず持論のグレー文化論がとび出して来るのだが、そうした「グレーの文化としての日本文化」の特質を彼自身の作品を創る上での発想の原点と考え、日本文化のコンテクストによって、おそらくは国際的な壮大な舞台で現代建築の再構築

を考えようとするあたりに、この「大人の建築家」にかくされた意外にあまいロマンチックな側面をかいま見るように思う。

それにしても著者が、理論と実践とをおどろくほどダイレクトに結びつける離れわざを現実は何回となくやっけてのける実力をもつ黒川紀章であってみれば、こうした甘い発想から思いもかけぬ成果が生れることもあながち夢ではないとも考えられる。刮目して待つことにしようではないか。

(向井正也)